宮古琉米文化会館の歩みとその活動
―元職員のインタービューを基に
―沖縄の米軍占領期における図書館についての総合的研究の一環―

漢　那　憲　治

１．はじめに
２．宮古琉米文化会館の歩み
３．宮古琉米文化会館の活動内容
４．元職員への聞き取り調査：活動とコメント
５．まとめ

１．はじめに

沖縄戦終結後（1945年６月）から琉球政府が1952年４月１日に発足するまでに、沖縄の行政機構は沖縄諮詢会、沖縄民政府、群島政府と変遷してきた。沖縄住民の中央政府である琉球政府は、立法（立法院）、行政（行政主席）、司法（琉球上訴裁判所）の３機構を備えた自治機構となり、1972年５月の本土復帰まで存続した。沖縄民政府時代に、住民側からの要請で沖縄県立中央図書館の再建がなされた。すなわち、1947年４月19日に中央図書館石川分館、８月９日に中央図書館（南部）、10月15日に首里分館、そして11月11日に名護分館が設置された。これらの図書館が1951年に首里分館を除いて改築や建替えされ、ことごとく琉球列島米国民政府・情報教育部の直接管轄下に入った。名称も本土の CIE 情報センターにならって、情報センター（文化情報会館）に改称されたが、「情報」という言葉の持つ当時の響きが悪いイメージを与えるとしてすぐに琉米文化会館（Ryukyuan-American Cultural Center）に直されたのである[1)]。

琉球政府時代になってから、1952年中に先島群島の平良市に宮古琉米文化会館、八重山群島の石垣市に八重山琉米文化会館が設置された。奄美群島の

奄美琉米文化会館はそれらより一年前の1951年４月名瀬に創設されたが1954年に本土復帰で閉館となった。

本稿では、平良市（現宮古島市）に設置された宮古琉米文化会館に焦点をあて、その歩みとその活動について、関連資料と元職員の聞き書きを基に明らかにしていきたい。宮古琉米文化会館については、これまでに元職員の砂川幸夫が活発にその活動内容を中心に発表してきた(1983、2000、2002、2004ａ、2004ｂ)。伊藤松彦は、1981年８月に鹿児島短期大学・南文化研究所総合学術調査団の一員として宮古島を訪れ宮古琉米文化会館の調査をしている（1982、2000)。さらに、琉米文化会館全般にわたっては小林文人グループが科研費を得て精力的に、沖縄の研究者も含めて調査研究を長期に行った経緯がある(1987、1988)。

なお、ここで使われている文献資料は科研費（平成15～16年度）による調査で収集したのも含めて、これまでに収集した琉米文化会館関係資料に基づいている。

２．宮古琉米文化会館の歩み

宮古琉米文化会館について述べる前に、沖縄における米軍の統治機構の変遷について触れることにする。米国海軍軍政府は1945年４月１日から1946年６月30日まで、米国陸軍軍政府は1946年７月１日より1950年12月14日まで、そして琉球列島米国民政府は1950年12月15日から1972年５月14日までの期間存続した。米国民政府としてスタートして直ぐに、情報センター構想が1950年12月21日に米軍の指令として発効している。それによれば、琉球列島の情報センターの運営と監督の責任課題を明確にすることで、センター・プログラムは米国占領軍（GHQ）の管轄にあり、琉球列島米国民政府は運営責任を負うことである。さらに、那覇、石川、名護、名瀬、平良市、石垣市の６つの情報センター運営のための充分な資金を請求して補正予算が直ぐに組まれることになるということである。ここに、奄美琉米文化会館、宮古琉米文化会館、八重山琉米文化会館の設置が決定されていたことが分かる。さらに注目すべきことは、首里図書館（分館）が情報センター構想から外されている

ことである。必然的に琉球政府の管轄になり琉球政府中央図書館として発展していき、復帰後は県立図書館として出発することになる。

この間の日琉米関係を見ると、1951年９月８日に対日講和条約が調印され、翌年の４月28日に発効した。琉球政府が1952年４月１日に発足している。それで対日講話条約調印を受けて、先ほどの指令の改訂が1952年２月14日に出されており、琉球列島の６つの情報センターはすべて琉球列島米国民政府（United States Civil Administration of the Ryukyu Islands, 略称USCAR、ユースカー）の管轄になり直接運営されることになった[2)]。

これを受けて宮古琉米文化会館は1952年８月に木造瓦葺のモダンな建物で設立されたのである。ただ、設立年の月日が問題である。米国民政府の年次報告では夏となっている[3)]。これまでの先行研究でも、４月とか７月とか８月とかとまちまちである。文化会館開館まえに職員として採用され、後に文化会館長になった大宜味猛の発令年月日は1952年４月９日となっている。それから類推すると、４月から開館準備を始めて８月にオープンしたとする方が妥当な線であろう。

ここで宮古群島について少しばかりスケッチしょう。宮古群島は沖縄本島と八重山群島の間に位置し、大小八つの島々（宮古島、伊良部島、下地島、池間島、大神島、来間島、多良間島、水納島）から成り、一市三町二村（平成の合併により、現在は一市一村）で構成されている。人口はおよそ５万7000人である。島の産業はほとんどサトウキビ作りで、ほかに葉タバコ栽培があり、宮古上布、海産物、農産加工品も盛んであるが、近頃は観光産業にも力を入れている。なお、米軍基地が小規模ながら存在する。それは米軍航空隊・通信基地であった。

琉米文化会館の目的は「琉米文化の交流と沖縄住民の教養を高め、調査研究やレクレーションの場として設立されたもので、図書や雑誌および視聴覚資料を備え、又各種の行事も催す」ものとして、『那覇琉米文化会館要覧』(n. d.)には謳われている。従って、琉米文化会館は図書館部と行事部から構成されていた。行事部は青少年健全育成活動、婦人の教養講座、成人英語講座、英会話教室、琉米親善スポーツおよびレックレーション行事、音楽活動等の教育・文化事業に携わり、沖縄住民の教養を高めると同時に沖縄の文化向上に

努めた。図書館部は図書資料の閲覧・貸出、移動図書館活動、巡回文庫活動、図書館週間行事や読書週間行事への協力および支援、公民館図書室活動の推進と育成その他図書館活動全般に寄与したのである。宮古琉米文化会館での具体的な活動は次章で詳しく紹介することにする。

このような活動を実践する中で、宮古琉米文化会館は1959年の築七年目に大型台風襲来により建物は倒壊してしまった。それで、1961年４月18日に鉄筋コンクリートのＬ字型二階建てに新築された。新館落成式典と祝賀芸能発表会が６月８日に盛大に挙行された。宮古琉米文化会館発行の『会館便り A Guide to MCC』新館落成記念特集号によれば、その会館の使命を次のように地元住民に知らせている。

宮古琉米文化会館は米国民政府によって運営されている全琉五つの琉米文化会館のうちの一つであり次のような使命を有しております。

１．宮古住民のための文化施設の提供

２．琉米間の相互理解と親善を深めるために琉米個人、団体、社会間の文化的結合を密接にする。

以上の目的使命を達成するため、文化会館では館内外に於いて多彩な行事を企画実施しております。これらの行事と図書、映画等を広く皆様に御紹介する為、当会館では毎月「会館便り」を発行いたします。

何卒本誌を道標とされて会館の各種行事にご参加くださるよう期待しております。

また、新館の庭園工事には島内の小・中・高校生およびボーイスカウトが奉仕作業に参加している（延べ1800人）。それに個人や団体から備品や図書が寄贈されていた。そのリストも掲載されている。備品としては、金屏風、ソファー、大型掲示板、鉢植、紅型緞帳、琉球民芸品（ショー・ケース付）があり、図書としては、プラスチック製立体世界地図、米国百科事典（全20巻）、平凡社の世界大百科事典（全32巻、書棚付）等である。

その落成式典には、米国民政府の先島文化会館顧問のサムエル・Ｈ・北村が出席し宮古社会の一員として「新しい一里塚」と題して祝辞を述べている。

その当時の職員数は12名で大宜味猛館長をはじめ川満進副館長そして10名の職員が配置されていた。

宮古琉米文化会館は約20年間にわたって米国民政府の管轄・援助のもとに琉米親善および地域文化の向上をめざして情報文化センターとしての図書館活動や教育・文化活動を進めてきたが、日本復帰とともにその幕を閉じることになったのである。これまで勤務してきた職員は1971年６月30日付で全員解雇された。宮古琉米文化会館の閉鎖にともない、日本政府は施設設備を買い上げ、平良市に無償譲渡した。1973年に同施設は「平良市文化センター」に改称され、これまでに築き上げられたものを受け継ぎながら市立図書館的なあるいは中央公民館的な性格をもたせて市民本位の文化施設として12年間運営された。そして1986年４月に平良市中央公民館が完成したことにより「平良市文化センター」から、ついに「平良市立図書館」に名称が変わった。純粋な公共図書館として生まれ変わったのである。この施設は1961年に宮古琉米文化会館が新築されてから42年余が経過して老朽化している。今の時代にふさわしい新館の建設が望まれている。

３．宮古琉米文化会館の活動内容

『庶民がつづる沖縄戦後生活史』（沖縄タイムス社、1988）から宮古出身の方が「モダンな文化いっぱい」という見出しで宮古琉米文化会館のことを書いている文章を次に紹介する。琉米文化会館活動の雰囲気が少しく分かるかと思われる。

今から、39年前のことですが、戦後社会も次第に復興し宮古の町にも活気が漂っておりました。その町の静かな環境の一角に配列よく植えられた庭木の中の歩道を通って行くと、エキゾチックな雰囲気をかもし出す建物が立っていました。それが宮古琉米文化会館。

中へ入って右側は舞台付のホール、左側はモダンな書棚にぎっしり書籍が並ぶ図書館になっていました。静かな中に学生たちが読書にふけっていた。

離島宮古の学生たちは知識欲や進学欲がおう盛でした。文化会館の図書館には、よく受験生が出入りして受験勉強に励んでいました。それからホールでは宮古郡の小、中学生の音楽発表会もなされておりました。

私にとって忘れがたい思い出がありました。それは高校二年生の時、数学の先生が「青少年非行防止について」論文を書いてみないかと言われ、張り切って図書館に通い資料を集めて原稿用紙四十枚の論文を書いて先生に提出した経験がありました。

1959年11月上覇。那覇市の崇元寺にある琉米文化会館に職場の友人と行き、混声合唱団に入ってサークル活動もしました。文化会館ではレコード鑑賞、フォークダンス、読書会など、学生や若者たちが出入りしておりました。音楽独唱の勉強で力強い声で高校生が歌っているのに心燃やされました。懐かしい青春の一コマです。

琉米文化会館の活動内容について、1961年１月９日付の米国民政府広報局文化事業部から５つの琉米文化会館長あてに出された「文化事業部の目的と機能」という文書に書かれているプログラムの見出しを紹介する。その後で宮古琉米文化会館で提供されていた具体的なプログラムについて見ることにする[4)]。

（１）琉米文化会館プログラム活動

ａ．図書館活動（Libraries）
ｂ．成人教育プログラム（Adult Education Program）
ｃ．音楽プログラム（Musical Program）
ｄ．レクレーション活動（Recreational Program）
ｅ．展示活動（Exhibits）
ｆ．ディスカッショングループ（Discussion Groups）
ｇ．演劇プログラム（Drama Program）
ｈ．フィルムプログラム（Film Program）
ｉ．文化会館の団体利用（Community Use of Cultural Centers）：会議、研修会等

ｊ．講義プログラム（Lectures）
ｋ．青年と婦人のグループ（Youth and Women's Groups）
ｌ．子どもの活動（Activities of Children）
ｍ．ボーイスカウトとガールスカウトとの連携(Coordination with Boy Scout & Girl Scout Organizations)：両スカウトに文化会館の活用促進活動

（２）モビルセンタープログラム（Mobil Center Program）：映画会、移動文庫、フォークダンス等
（３）センター外のプログラム（Out-of-Center Program）：美術工芸、視聴覚教材の作成、図書館協会との連携
（４）地域社会と関連したプログラム(Community Relations Program)：琉球文化の米国人への紹介、音楽や芸能関係者との交換プログラム等

こうしたプログラム計画の具現化を、宮古琉米文化会館発行の『CALENDER OF EVENTS　行事カレンダー』1969年１月号の内容から見ておこう。当時、会館は毎日開放し午前９時から午後９時半まで開館していた。職員は館長、副館長、行事担当、そして司書らの11名で職務を遂行したのである[5)]。

『1969年１月の全プログラム』
＜１月の主な催し物（Special Events)＞
＊「書道五人展」４、６、７日　ホール
＊少女合唱団ピクニック　４日・10時　白川浜
＊「新春いけばな展（出品：いけばな教室会員)」　７日　ホール
＊「年賀状・カレンダー展」　７日～20日　ショーケース
＊「写真展“ブエノスアイレス”」　９日～20日　ホール
＊「各内会対抗少年サッカー大会（準決勝・決勝戦)」　12日・10時　北小学校庭
＊「宮城道雄レコードコンサート」　14日・７時30分　ホール
＊「新春バライティショー（アマチュア・タレントによる落語、ギター演奏、手品等)」　16日・７時30分　ホール

＊「アメリカ人の為の宮古研究サークル」　18日・４時　クラスルーム
宮古の歴史、文化に興味を持つ野原航空隊の隊員で組織されるサークルで、名所旧跡を訪ね、郷土史をひもときながら宮古に対する認識を深めてもらう集い

＊「魚拓教室・４年生（全４回）」　20日・４時　クラスルーム

＊「ショーケース展示“たこのつくり方”」　20日～31日　ロビー

＊「絵葉書で巡るアメリカの旅」　21日～31日　ロビー

＜図書館展示（Library Display）＞

＊図書室ショーケース　３日～31日　「私のコレクション“人形”」
山里秀美

＊図書室　３日～31日　「ボーイスカウト関係資料展」

＜村の映画会（Mobil Unit Program）＞

３日－保良　６日－山中　10日－長北　13日－吉野　17日－久貝
20日－宮原　24日－西原　27日－砂川　31日－嘉手刈

＜貸出文庫（Book Deposits）＞

９日：Ｃルート　城辺南部　　16日：Ｄルート　城辺北部
23日：Ｅルート　平 良 市　　30日：Ａルート　下 地 町

＜主婦の貸出文庫（Book Deposits for Homemakers）＞

８日：４コース　城辺町　　15日：１コース　平良市
22日：２コース　下地町　　29日：３コース　城辺町

＜移動文庫（Mobil Library “YAMABIKO”）＞

７日、21日：下地町役所・沖縄製糖
14日、28日：城辺町役所・宮古製糖

＜移動写真展“フロリダ州”（Mobil Photo Exhibit “Florida, US”）＞

７日～14日：城辺町役所　　14日～21日：上野村役所
21日～28日：下地農業協同組合
９日～16日：下地中学校　　16日～23日：久松中学校
16日～30日：狩俣中学校

週間定期行事（Regular Events）

月：小学校魚拓教室　4：00
　村の映画会　6：00
　宮古民謡を学ぶ会　7：00
　ELO 成人英語講座　7：30
火：移動写真展　10：00
　移動文庫“やまびこ”　1：00
　ピンポンクラブ　4：00
　小学生読書会　4：30
　中学生英語教室・1年　6：30
　　講師・Lt. Mike Wolfson
　いけばな教室・中級　7：30
　　講師・喜納　照月
水：主婦の貸出文庫　2：00
　小学生英語教室・5、6年　3：30
　小学生英語教室・3、4年　4：00
　映画英会話教室　7：30
　クイチャーを楽しむ会　8：00
　郷土史研究会　9：00
　ELC 成人英会話講座　7：30
木：移動写真展　10：00
　貸出文庫・交換　1：00
　幼児教室　2：00
　子供人形劇クラブ　4：00
　和裁教室　2：00
　　講師・喜納　照子
　模型飛行機クラブ　4：00
　中学生英語教室・2年　6：30
　成人英会話教室　7：30
　　講師・Mr. Charles Sakamoto
金：ピンポンクラブ　4：00
　村の映画会　6：00
　高校生英会話教室　7：30
　　講師・Lt. Don Gilbert
　ギター・アンサンブル　7：30
　　指揮・下地　恵修
　ELC 成人英会話講座　7：30
土：カブスカウト集会　2：00
　ガールスカウト集会　3：00
　MCC 少女合唱団　3：00
　　指揮・本村　浩一

月例行事（Monthly Events）

第1金曜日・7時　野鳥の会
第2金曜日・7時　宮古ラン協会
第2水曜日・9時　クイチャー普及会
第3月曜日・8時　交流会
第4土曜日・2時　琉球郵趣会宮古支部
第3土曜日・4時　宮古研究サークル

以上で宮古琉米文化会館の多彩な活動内容（図書館活動および行事活動）が概観できたことであろう。しかも、これは沖縄の本土復帰がほぼ確実になっ

た時期において猶このような活動が精力的になされたのには注目する必要がある、なお、この種の行事カレンダーは各琉米文化会館で個別に毎月発行されて、それは英語と日本語の併記のパンフレットであった。ポスター、チラシ、展示物等には、英語・日本語の併記が琉米文化会館の決まりであった。

次に企画長であった元職員（大学院卒、1967年８月９日～1971年６月30日まで在職）の聞き書きを基に、担当されたプログラムを具体的に示すと次の通りである[6)]。

Ⅰ．定期講座（週１回）

１．「小学生の英会話」（16：00～17：00）（３ヵ月）

対象は小学校３年生以上、受講者は20名程、過半数は女児

２．「上級英会話」（19：00～21：00）（年間通して実施）

対象は成人、受講者約12名（殆どが男子公務員）

受講者は教員、判事、銀行員等で、教員の中から米国留学をしてMA 取得後、校長等に昇進を果たした者も幾人かいる。

３．「宮古少女合唱団」（15：00～17：00）（年間通して実施）

対象は小学校５～６年生で30名ほど受講。主に世界、日本、沖縄の童謡を中心に選曲したが、NHK「みんなの歌」もよく使われた。年１回発表会を持つ。また、NHK 宮古ローカル番組にも１回出演。（歌の選曲と日常の練習は企画長が担当、公的な発表では地元の音楽教師に依頼）

４．「幼児教室」（14：00～15：00）（半年実施）

対象は幼稚園児、参加者は約15名（女児が多かった）、参加していた子どもたちは、地元の幼稚園児で帰宅後、このプログラムに参加していた。

コーナー保育（ママゴト、積み木、自然物等のコーナーを設けての子ども中心の保育）と設定保育（表現遊び、工作遊び、自然物を使っての遊び等）を実施。その当時は教師主導型保育が主流だったので、このような保育方法を地元の幼稚園教諭や保母が見学に来ることもあった。

５．「ヤングレディス教養講座」（19：00～21：00）（３ヶ月）
　　対象はヤングレディスで参加者は約15名
　　宮古の歴史、家庭と保育、栄養と料理、礼儀作法等
６．「宮古島の歴史」（３ヶ月）
　　対象は成人、参加者約15名（軍人が多数）
　　宮古島の簡単な歴史を学ぶ。フィルドトリップも含む。
７．「日本語（初級）」（19：00～21：00）（３ヶ月コース）
　　対象は外国人（軍人）、参加者は約20名。
　　メリーランド大学講座（出張講座：野原航空隊）

この企画長は、米国民政府より婦人国民指導員および世話役としてアメリカ合衆国に派遣された（1969年４月18日から35日間）。また、ランパート高等弁務官（沖縄最後の高等弁務官）が宮古島を視察した際（1970年６月28日）、ランパート夫人に宮古地区婦人会活動の紹介と交流プログラムをコーディネートしたのも彼女である[7)]。

米国民政府（USCAR）はスタッフの専門性を重視し、琉米文化会館をはじめ琉米親善センターや図書館関係者の司書資格取得、およびレベルアップ講習にはかなり積極的に助成や支援をしていた。琉米文化会館が全琉の５ヵ所に設置された当初の1951年に東京の図書館養成所に５名（名護１名、石川２名、那覇１名、八重山１名、琉球大学図書館１名）を派遣している。その中の一人が那覇琉米文化会館の儀部守男でその後全琉の文化会館を束ねる司書長となり、図書選択に関わったスタッフであった。宮古琉米文化会館の砂川幸夫は、1966年７月～８月27日まで、東洋大学の司書講習を受講し、司書（補）の資格を取得している。そのとき同行したのは、４名（名護１名、石川１名、八重山１名、コザ琉米親善センター１名）であった。また、ハワイの東西センターへの派遣や、米国本土での図書館学校（修士）留学制度もあった。ハワイ東西センターへは、宮古琉米文化会館からは大宜味猛や川満進らが研修に派遣されている。前述した砂川幸夫は順番として予定に載っていたが、復帰直前の時期で東西センター行きは実現されなかった。

４．元職員への聞き取り調査

宮古琉米文化会館が開館（1952年８月）されてから閉館（1971年６月）されるまでに、そこに勤務した職員は、累計41名に達する。そのうち10名ほどに聞き取り調査をした[8)]。文化会館で沖縄人スタッフとして働いていたこれらの方々の業務・活動への取り組みや思いをを中心に紹介する。その前に１名の方に文化会館への就職の動機を聞いた話しから始める。

＜就職動機＞

この女史（プログラム担当）は、本土での大学を卒業した後、宮古に戻り下地中学校の教諭に内定していた。内定を蹴ってまでも丁度その時、空きがあった宮古琉米文化会館に入ったのはどうしてか？

当時としては、一番ハイカラで憧れの職場だったような気がする。特に宮古島のような地域においては、やっぱり文化の先端をいくような雰囲気がありましたので。

もう一つの要因は、「給料がよかったことで、公務員の倍近くはあった」と、別の女子職員がコメントしていた。

＜活動全体についてのコメント＞

砂川幸夫（1962年11月～1971年６月在職）は復帰後、沖縄県立図書館宮古分館長になった。彼にはこれまでに何度も文化会館のお話を聞く機会をもつことができた。以下彼の証言：

私の場合はいわゆる図書室担当ということで、サービスエリアは宮古全体ですよね。離島へは２～３度しか行ったことがないですけど、まさに宮古全島にまたがって活動を展開したと思います。図書室としては館内の閲覧業務はもちろんのこと、その他、各市町村を巡回文庫であり、１日移動図書館であり、全島にまたがって図書館活動を展開したんじゃないかと思

います。また館内においては小学生の読書会とか、一般の読書会とかを開いたりしました。さらに、起案して講演会とかいったものも開催しました。

当時の文化会館というのはまさに行事担当は行事が盛んに館内で行なわれ、それが幼児から大人まで、つまり幼児といえば幼児教室、子どもといえばいろいろな子どもクラブ、英語教室、中・高・一般にもありとあらゆる行事を盛んにして、また図書室としても読書活動を展開し、まさに館内であれ、館外であれ、それをくまなくやったと思います。

私自身としてもそういうことをやるのを指導者（筆者注、ハワイ二世の向田と北村）が言うように非常に当然だと思っていたしね、別にこれはアメリカの事業として云々ということじゃなくて、まさに宮古の文化活動の拠点としてそれを当然やるべきだと思いました。むしろ逆に言えば誇りにも思えるんじゃないかというような気持ちでやってきましたよ。ですから、県立図書館宮古分館に勤めるようになっても、やはり図書館は行事も大切だということにおいてはいろんな行事、例えば俳句教室を開いたり、あるいは郷土史講座を始めたりした。この郷土史講座はそれ以来ずうーと継続しています。まあ、行事はいわゆる図書館活動の二次的な活動とは思いますけど、これも図書館の資料を役立たせながら展開していくことはいいことじゃないかと思いつつやってきました。

結論として、10年間の勤務でいわゆるユースカーの職員という形でありましたけど、まさに琉米の、つまり琉球とアメリカとの架け橋になって、そしてその文化をやっぱりアメリカの文化というよりも、その文化活動と言うのかな、その地域の文化活動と言うのかな、地元の文化活動というものを文化会館で全てのことを展開していったと思います。先ほどから話が出ているように、幼児からお年寄りまでくまなくありとあらゆる文化活動を起案し、それを実行してきたと。

やっぱりその大きな恩恵というのは、今言ったようにポスターカラーであり、カラフルなカードボードであり、あるいは図書であり、あるいはそれを製本する機具であり、あるいは映写機であり、ブックモビルの自動車であり、そのありとあらゆる恩恵を受けながら、それを本にしてその文化活動を展開してきたということは言えると思います。

＜地域文化の掘り起こし＞

行事（プログラム）部担当が文化活動としてのプログラムを作成する場合、講師謝礼を計上できず、全てボランティア精神で無料であった。謝礼を出さずにボランテイア精神をどうやって講師の皆さんにお願いするかというのが一番気を使ったことらしい。ボランテイアとという言葉を初めて聞いたというのがインタビューした元職員の一致した発言であった。これらの指導には、月１回のスタッフ・ミーティングで、先に述べたハワイ二世の米国民政府のサムエル・N・向田（琉米文化会館課長－1956年～1971年在職）とサムエル・H・北村（先島文化会館顧問－1957～1972年在職）によって行なわれた。以下元女子職員たちの証言：

＊ミーティングでは、あなた方はプロフェッショナルです。そういうことから始まるんです。専門職ですから、宮古の地域社会にどういう事ができるかをまず考えなさい。宮古にはこいうね、絵画の先生であり書道の先生であり或いは生花の先生であり、いろんな行事を引き受けてもらえる先生方がいるはずです。そういう人たちを招いてきてね、それを歓迎するのがあなた方の役目です。

＊たとえば、あなた方御婦人は市場に買物しに行くでしょう。そういう時にはちゃんと文化会館に入った図書等を紹介してますか､そういうPRをたえずしないと向こうにはわからない。こんな物が入りましたよ、だからいらっしゃい、そういう事を言っていますかとかね。ですから、もうやっぱり言わないとまずいかなと思うような気分にさせられるんですよね。

＊やっぱり占領下で私たちはこの人たちに使われているというイメージではなくて、むしろ非常に何ていうのかしら、どうやって住民の為にあなた達は役に立てるように頑張っているか、そしてその地域に宮古で私たちが宮古に講師になる方が誰もいないとかね、資格がないとかしたら、それはあなた達の勉強不足です。そうおっしゃいましたね。ある地域には必ずすばらしいエクスパートがいます。あなたはそれを知らないで。そういう方が必ずいるからそういう方たちを招いて、そしてどうやって

地域の人たちにね、この人たちに教えるような伝える喜びを、あなた方が引き出す。何もあなたが教えるのではないんだ。あなたは引き出す役目ですよって。

＊それでね、いかに人を使ってそしてその人をしかも喜んで人にしてもらうかって。いつも喜んでこの人が人の役に立つ為、要するにボランテイアとしてこの人が喜んで働けるように、あなたは工夫しやること、それがプロフェッショナルの仕事だ。いつもいわれましてね、だから何かの代償としてするっていうことではないですね。その人が喜んでするようにしむけなさいっていう事です。

＊いろいろな講座やクラスは一定の期間を設けて実施するので、それらが終わった時点で、閉会式や解散式にはわりと盛大というか華やかに心のこもった手作りのパーティを参加者全員で催し、ボランテイア講師への感謝の気持ちを表しました。

その結果、絵画・書道・写真・生花・和裁・郷土史・宮古民謡等の講師を探して多彩な講座・教室を開設、提供できたのである。

それでは、英語講座や英会話教室などの講師はどうして探すかという証言の一例を以下に掲げる。

＊美代子先生がプログラムを作って宮古の紹介、文化の紹介とか今で言う史跡めぐりを外人の兵隊さんとかいろいろな方たちを対象にして実践したり、それから宮古の名所旧跡を見学とかいって日曜日にプログラムを組んであっちこっちと宮古を案内、今で言えば観光のような形で随分そういうプログラムを作りました。それから、わたしの場合は、そこに参加している人たちの中から何名かを頼んで子供の英会話クラスの講師に頼むとか、小中高生を対象にたくさんの英会話クラスを持ちまして、たくさん頼んで講師に来ていただくということで、もう十幾つかもの英会話クラスを作りました。

それで基地の方たちもそういう風に文化センターの講師に行くというと外出許可がすぐに下りるとのことで喜んで来て下さいました。それで、

転勤なさいますから次々と宮古へ行ったら文化センターで１～２年かを講師をしなさいと言われてね。やっぱり次々と言い方を紹介していただいてね、本当にとてもいい人たちばかりでした。

＊それでトラブルがあったということは一度もありませんでした。夜の９時頃まで大人の成人英語講座もしますけれど、みんないい方ばっかりで、それで、講座を終わる時はみんなで名残惜しんで送別会をしたり、その方が除隊して転勤なさるとかという時は、随分盛大な送別会をしたりして、いろいろな意味で国際交流会をもてました。

以上見てきたように、アドバイザーとしての向田や北村の巧みな指導助言は、沖縄人スタッフを、文化活動のあり方や進め方・プログラムの作り方等についてうまく訓練し、自立して自主的に地域住民に対するプログラムを作成し実行に移すことができるようにしむけたのである。それ故に、宮古琉米文化会館にたいする元職員の認識は概ね好意的で占領側が意図する対沖縄文化政策の「宣撫工作」とはうらはらに地域文化と住民の向上に貢献したものと、どちらかというとプラスの評価が高いようである。

５．まとめ

占領下沖縄において絶対的権力を持った米軍・米国民政府（USCAR）が設置し運営した文化／社会教育施設としての琉米文化会館は、「基本的にアメリカの対沖縄占領政策に強く規定され、宣撫的文化政策の拠点としての役割を果たしてきた」[9]ことは否定できないが、それでも琉米文化会館は、設立の当初より図書館施設としての側面を大きく担っていたことは注目に値する。

宮城悦二郎（1991）は、米軍・民政府の文化政策には次の３つの方法がとられていたと指摘する。

１）奨励・助成・支持：伝統文化への支持、文化財保護等を通して自己の文化への誇りと自信を涵養、文化的アイデンティティの確立、博物館建設等。

２）規制・抑圧・禁止：布令等による禁止、圧力よる指導、“不穏”文書所持・配布の禁止（言論活動）、復帰運動、渡航、反共政策。

３）積　極　的　説　得：琉米文化会館活動を通してのアメリカン・イデオロギーの浸透、米琉親善行事、米国民政府 PR 活動。

これらの１）と３）が琉米文化会館活動において主として実践されていたのである。宮古において１）の奨励・支持の方法では、伝統文化以外に、花いっぱい協会などの組織作りさせて、それから発展して、蘭協会や観葉植物協会などが設立された。それで文化会館では季節の花の展示会が定期的に開かれたのである。このように宮古琉米文化会館の活動や諸行事を契機にして、各種のサークル、クラブ、団体などが生まれる素地を築いたのである。

これまで見てきたように、宮古琉米文化会館の沖縄人スタッフは USCAR の職員として、同時代の日本各都市の文化施設と比べても水準の高い施設と備品（視聴覚機器も含む）をもって、宮古の住民（島民）へ近代的な図書館サービスや多彩なプログラムを提供していたことが明らかになった。従って、米国民政府の意図がどうであれ、島民たちは文化会館を自分のニーズに合わせて利用したし、地元の公民館は不十分でモノや施設が少なかった時代だけに、結構ハイカラな施設として有り難がられた面もあったことは否めない。付け加えると、宮古琉米文化会館は当時の宮古において“島民たちが自分たちの「文化」を自己確認できる「場」あるいは「空間」を提供していたと言える。個々人の生活史を辿れば、個が自己の完成を目指して上昇を試みるその契機となる「場」足りえた”[10]とも考えられる。

今後の課題として、これまでにインタビューした資料をもっと詳細に分析し、利用者の声をもっと反映させ、かつ沖縄本島と違う琉米文化会館の実相を把握することである。本稿は宮古琉米文化会館に関する研究の試論にすぎない。

【注】

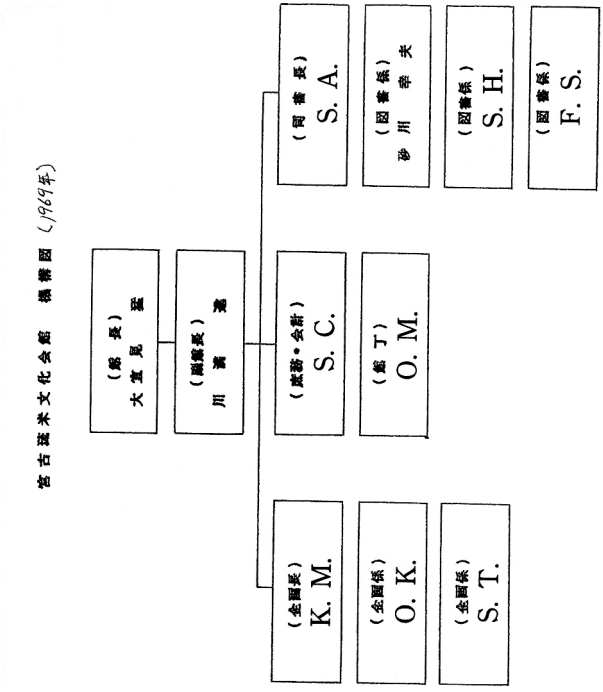
１）川平朝申、1997、p.278-279.

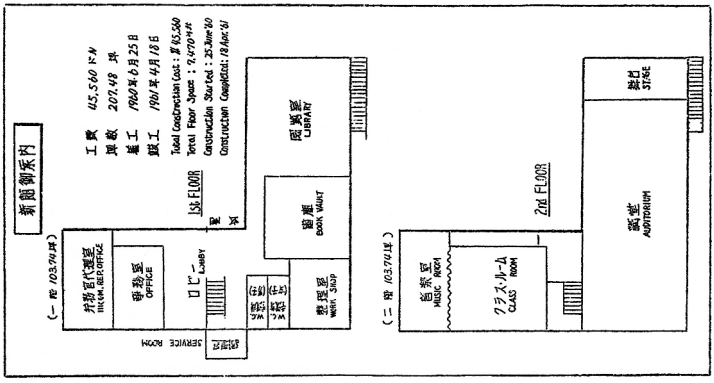
2）USCAR Office of the Deputy Governor APO 719　14 February 1952.

3）Civil Affairs Activities in the Ryukyu Islands 1952.

4）USCAR APO 3311　9 January 1961.

5）宮古琉米文化会館の新館の見取り図と組織表（1967年頃）。





６）筆者宛の私信：2007年４月６日「神山美代子の宮古琉米文化会館における担当プログラム及び業務内容」。

７）占領下沖縄における高等弁務官制度は1957年に設けられた。高等弁務官は沖縄における最高権力者で「沖縄の帝王」とも呼ばれた。ランパート高等弁務官は第６代目である。

８）元職員への聞き取り調査は、1990年代より、いろいろな機会をとらえて実施してきた。今回は主として2004年２月中旬に宮古で聞き取りしたものに基づいている。

９）小林文人・小林平造、1987、p.130.

10）古波蔵剛、2000、p.3.

【参考文献】

伊藤松彦「“琉米文化会館”と沖縄の図書館」『薩琉文化』第19号（1982．９．３）、p.１～４.

伊藤松彦「琉米文化会館の影と光」『沖縄の図書館―戦後55年の軌跡』（『沖縄の図書館』編集委員会編、教育史料出版会、2000）、p.39～45.

川平朝申『終戦後の沖縄文化行政史』那覇：月刊沖縄社、1997.

漢那憲治「米軍占領下初期における沖縄の図書館復興過程に関する試論」『同志社図書館情報学』第13号（2003）、p.１～26.

漢那憲治「占領下沖縄における公共図書館の復興過程とその変遷についての研究」『文化学年報』第54号（2005）、p.82～102.

小林文人・小林平造「アメリカ占領下・沖縄の社会教育―とくに琉米文化会館を中心に」『東京学芸大学紀要』第１部門（教育科学）、第37集（1987）、p.119～134.

小林文人・平良研一『民衆と教育―戦後沖縄社会教育史研究』エイデル研究所、1988.

古波蔵剛「占領地における米国の社会教育施設―住民の語りの中に見る琉米文化会館の受容―」日本大学、修士論文、2000.

宮城悦二郎「アメリカ文化との遭遇―対沖縄文化政策とその受容に関する試論」『新沖縄文学』No.89（1991, Autumn）、p.14～20.

砂川幸夫“「宮古琉米文化会館」の文化活動を振り返って”『地域と文化　沖縄を見直すために』第20号（1983．８．15)、p.16～20.

砂川幸夫「県立図書館宮古分館など」『沖縄の図書館―戦後55年の軌跡』(『沖縄の図書館』編集委員会編、教育史料出版会、2000)、p.240～246.

砂川幸夫「宮古琉米文化会館のあゆみ」『宮古郷土史研究会会報』No.129(2002).

砂川幸夫「戦後宮古の文化活動・宮古琉米文化会館」『宮古の自然・文化便り』第27号（2004ａ).

砂川幸夫「宮古琉米文化会館のあゆみ」『宮古研究』(宮古郷土史研究会編)、第９号（2004ｂ)、p.45～51.

USCAR Office of the Deputy Governor APO 331 Operational Instructions Number 2 21 December 1950 “Information Center Program”

USCAR Office of the Deputy Governor APO 719 Operational Instructions Number 44 14 February 1952 “Information Center Program”

USCAR APO 331 HCRI-PI 9 January 1961

Memorandum to: Director, Naha Cultural Center
Director, Nago Cultural Center
Director, Ishikawa Cultural Center
Director, Miyako Cultural Center
Director, Yaeyama Cultural Center

Subject: Objectives and Functions of the Cultural Affairs Division, OPA

（かんな・けんじ　2007年５月８日受理）